



ホーム>世界>インド「ダリットたちの尊厳回復プログラム」報告6

一緒に歩もう！一緒に変わろう！「立ち上がった世界の人々」の21世紀の夢を応援しよう！



現在

抑圧された人々、ダリットたちの尊厳回復プログラム

南アジア・インド北部

世界観が、教育や健康さえも左右することに気づく！ 差別されないために ～補習クラスと衛生的な環境～

長い間、インドの最下層で虐げられてきたダリットの子どもたちが教育を受け、衛生的な環境で暮らすことは、いまでもそれほど当たり前ではない。教育がどれほど重要であっても、学校に出かけた瞬間、差別を受けて心がくじけて通えなくなってしまう子がたくさんいる。子どもたちが自ら、また他の人々と協力して、人生を切り開く力を身につけるはずの教育から弾き飛ばされないように、地域の大人のサポートは欠かせない。けれども、大人たちの多くも文字の読み書きを知らないのだ。そこで、文字の読み書き能力を得る機会がなかった大人たちが子どもたちの教育サポートの大切さを理解できるように、彼らにも識字教育の機会を提供する必要がある。何よりも、信頼されている地域のリーダーたちが実際に動き出すことが、しばしば大きな前進につながる。そこで、2・3月に、地域のリーダーたちは、子どもたちが学校から弾き飛ばされないように、無料の補習クラスと大人の識字教室開講の準備のために、ラム・スラットは研修会を提案し、彼らに先生を選んでもらうことにした。同時に、衛生的な生活の必要に気づいてもらう研修を開催した。



ある村での教育レベルの実態調査

まず、ある村で実際に教育レベルがどの程度か、村民と共に調べてみた。この村では47家族中、15人が高卒、10人が中卒、そして、一人だけ大学を出ていた。けれども、この人は子どもによりよい勉強を受けさせたいとすでに町に移住していた。つまり、半分以上の家族には、文字の読み書きが十分な人がひとりもないのだった。特に、ダリットの女性が教育を受けることは論外に近い。また、別の村の公立学校の教育の質を論じ合った。一つの学校では6人の先生が約300人の生徒に教えているが、中学2年になっても英語で自分や親の名前が書けない生徒が続出しているという。

研修で学んだこと

ダリットの地域リーダーたちは研修会で最初に、自分たちがどのように教育制度から除外されてきたかを検証した。ラーマーヤナには運命論的な思考を決定づけるこんなくだりがある。「奴隷の身分の者たちが、どれほど学んだところで、まともな作法も話し方も何も彼らの身につかない。なぜなら、神は彼らを見放し、その資質を奪い去っているのだから。」 彼らは、自分たちの

心に植え込まれてきた教えを客観的に把握しようとした。同時に、本当の知識を得ることがどれだけ重要かを確認した。「わたしの民は知識がないので滅ぼされる。」(聖書) 真実の神ならば、すべての人が本当の知識を身につけて欲しいと願っているはずだ。そして、真実の知識を求めなければ、民全体が減ってしまうのだ、ということをリーダーたちは深く心に留めるようになった。また、衛生的な環境の大切さに注意を向ける研修も一緒に行われた。私たちは呪われた存在としてではなく、健康に気をつけることも含めて、与えられた命を祝福されて全うする存在として造られていることに気づいてもらった。このことを通して、家の外の草むら、道端、森ならどこでもトイレになる！という発想は非衛生的で、決まった場所にトイレを作らなければならないという意識を広める必要にリーダーたちは気づいていった。



研修会の結果

研修会を受けてリーダーたちは、子どもたちの補習クラスや大人の識字や衛生知識を学ぶ教室のため、自分たちや地域みんなで、少しでも財政支援をしたいという思いが起こされそのことも話し合われた。教育や衛生の教材を、郡役所からもらいうけようと動き出した。郡役所を訪問すると、教材を率先して配布すべき職員が事務所の中で何もしないでただ座っている姿に出くわした。一方で、リーダーたちが選んだ二人の先生は、補習クラスや識字教育などの指導に今、とても情熱をもっている。そして、ひとりのリーダーは、近隣の村々で、「草むらトイレ撤廃運動」を始めることにしたのだ。

日本からの応答

インドから彼らの格闘のレポートを読むと、教育を通して知識を得る意味も、衛生的な環境を作りだしてどのような健康的暮らしをするのかということも、実は、私たちが世界はどのように動いていると信じているかに左右されていることに気がつかされる。現代日本社会を振り返れば、いま、方向性が揺れ動いている「教育」、そして「医療・健康」などについて、「私たち日本人は、世界がどのように成り立ち、動き、どこへ向かっていると信じて(小さい頃から信じ込まされて、または行き当たりばったりの流行の考えに翻弄されて)行動しているのか」、その世界観を検証するところから問題を解きほぐし、より真実のあり方に近づける必要を感じたのだった。

[プログラム内容](#) [報告1](#) [報告2](#) [報告3](#) [年間レポート](#) [報告4](#) [報告5](#) [報告6](#) [報告7](#) [報告8](#)

[Page Top](#)

[Share](#) |

[ホーム](#) [活動内容](#) [FVIの特徴](#) [参加する](#) [寄付・献金](#) [お問い合わせ](#)

Copyright(c) Friends with the voiceless International All Right Reserved

